



第52回日本肝癌研究会

泉 並木

武蔵野赤十字病院院長

第52回日本肝癌研究会の会長を拝命し、7月1、2日に虎ノ門ヒルズフォーラムで開催しました。会員医師など1,000名を超える人にご参加いただき、大変盛り上がった会になりました。日本肝癌研究会は内科、外科、放射線科、病理など異なる専門の医師が一堂に会して、それぞれの立場から議論する有意義な会だと思っています。

C型肝炎ウイルスが、内服抗ウイルス薬の12週間の治療によって大多数の患者でウイルス排除(sustained virologic response : SVR)が得られ、しかもこれまでのインターフェロンではウイルス排除が困難であった代償性肝硬変患者に対してSVRが得られるようになりました。そこで、今後肝癌診療に2つの大きな変化が生じると予想されます。1つは、SVRを得ることによって肝硬変が進行せず肝機能の悪化が防げることです。そのため肝癌治療のアルゴリズムが変化すると考えられます。2つ目はSVRを得ることによって、肝発癌リスクが変化するため、サーベイランスシステムを変更する必要があるかどうかについて討議する必要があります。そこで、

高率にウイルス排除が得られるようになった年を反映して第52回日本肝癌研究会のメインテーマを、「肝癌診療新たなステージへ」にいたしました。

肝癌に対する免疫チェックポイント阻害剤が話題になってきたため、「腫瘍免疫学の進歩と新たな時代を迎えたがん免疫療法」について慶應義塾大学医学部先端医科学研究所の河上裕先生に特別講演をお願いしました。特異抗原を用いたワクチン治療から免疫チェックポイント阻害剤まで多岐にわたる盛りだくさんのお話をいただきました。特別報告として、日本肝癌研究会の会員が知っておくべき「職業性胆管癌の臨床と対策」について、大阪市立大学肝胆膵外科学の久保正三先生に、教育講演として、「肝癌の病理診断」について慶應義塾大学病理学の坂元亨宇先生にお話をいただきました。いずれも、会員一同にとって大変意義深い講演であったと思います。たくさんの質問がフロアからあがりました。

今回の研究会では3つの国際シンポジウムを企画しました。1つ目は進歩が著しいTACEに関するものです。



写真1 第52回日本肝癌研究会開会式



写真2 国際シンポジウムの様子